

二〇二五年度 入学試験問題

国 語

第三回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから九ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

【1次の文章は、戸谷洋志『悪いことはなぜ楽しいのか』の一節で、「復讐」というあり方を論じた箇所です。これを読んで後の問いに答えなさい。

復讐心がイジワルと異なるのは、それが激しい怒りに駆られたものである、ということではないでしょうか。★イワンがアレクセイに自らの復讐心を認めさせるためにしたのは、残酷な話を聞かせて、彼を怒らせることでした。当たり前のことですが、怒りは私たちにとって苦痛です。(1)ところが、同時に復讐には、どこか甘美な側面も含まれています。復讐を果たすとき、私たちはそれを喜ばしくも感じているのです。そうであるとする、復讐には、苦痛と快楽、その両方が含まれているということになります。しかし、両者は正反対に位置する概念のはずです。なぜ、復讐において、その二つが同時に成立するのでしょうか。

この問題に明瞭な回答を示したのが、古代ギリシャの哲学者である、アリストテレスでした。

彼もまた、復讐を怒りとの関係から説明しています。すなわち私たちは、正当な理由がなく軽蔑されるときに、怒りを感じる。そしてその怒りは、軽蔑してきた相手に対して復讐しようとする欲求に他ならない。つまり、彼の説明では、私たちが誰かに怒るときは、その誰かに復讐したいと思っているときなのです。

ところで、アリストテレスによれば、欲求が満たされることは快楽をもたらします。その上、たとえ欲求が実際に満たされなくても、その欲求が満たされそうだと思うこと、つまり自分の目標が「タッセイできそうだと思うこと」だけでも、私たちは快楽を感じるので、だからこそ、復讐心はある種の快楽をもたらす、と彼は主張します。

つまり、こういうことです。私たちが誰かに軽蔑されると、私たちは苦痛を感じ、その誰かに復讐したいと思います。それが怒りです。しかしそのとき、私たちは自分がその気になれば相手に復讐できるだろう、たとえ具体的にこういう行動をすれば復讐できるだろう、と期待することがあります。その「サンダン」を立てているとき、私たちは快楽を感じるので、このような理由で、復讐心において、苦痛と快楽が両立するということがなります。

ただし、アリストテレスの考えでは、復讐は必ずしも当事者が果たさなければならぬわけではありません。たとえば、「私」を軽蔑した人間が、

別の何かによって報いを受けたと思われるとき、「私」は自分の復讐が果たされたように感じ、怒りは鎮まる、と彼は主張します。

私たちは明らかに復讐を楽しんでいます。A それは私たちの欲求を叶えてくれるからです。しかし、同時にその欲求は苦痛に駆られています。B 復讐することは、ただ楽しいことばかりではありません。復讐心に駆られている人は、同時に自分自身をすり減らし、苦しみながらそうしているのです。

そうだとすると、復讐することを手放して肯定することは難しくそうです。強い復讐心を抱くことは、同時に強い苦しみを抱え込むことを意味するからです。前述のイワンは、アレクセイに復讐心を認めさせるために、ありとあらゆる残酷な話を披露しましたが、そんな話をシユウシユウしている彼の心は、もしかしたらアレクセイよりもはるかに傷ついているのかもしれない。(2)

復讐は、確かに私たちが喜ばせません。C それは同時に苦痛を伴います。だからこそ、私たちは復讐に対して、何らかの限界を設定しなければなりません。たとえば、前述の「目には目を、歯には歯を」という同害報復の「ゲンリ」は、まさにそうした限界を示す規則としても理解することができます。(3)

しかし、アリストテレスは、この概念では復讐の限界を正しく示すことはできない、と考えました。「目には目を、歯には歯を」は、自分がされたことと同じことを、相手にもすることを認めます。しかし、そもそも「同じこと」とはいったい何なのでしょう。

もう少し具体的な例で考えてみましょう。「私」が、親から誕生日に買ったもらった大切な靴を、他人に壊されてしまったとします。「目には目を、歯には歯を」の原則に従うなら、「私」は、靴を壊した他人の靴を壊すことを、復讐として許されます。しかし、もしかししたら、その他人にとってその靴はたいした思い入れのない、どうでもいいものかもしれません。そうであるとしたら、D 「私」の靴と他の靴が同じような値段であったとしても、その靴を壊されたというこの意味は違います。大切な靴を壊された「私」は、他人にとってのどうでもいい靴を壊したとしても、決して気が収まらないでしょう。

つまり復讐は、「私」に対してなされたことの意味と、ちょうど同じような意味をもつことを、相手にも行うことを必要とするのです。そして、そ

★イワン……小説『カラマゾフの兄弟』に登場する三人の息子のうちの次男。無神論者で合理的な人物として描かれる。

★アレクセイ……小説『カラマゾフの兄弟』に登場する三人の息子のうちの三男。敬虔なキリスト教徒として描かれる。

★「目には目を、歯には歯を」

…紀元前一八世紀にバビロニアで制定されたといわれている「ハンムラビ法典」の中の記述。他者を傷つけた者は、自らも同じだけ傷つけられなければならないというきまり。

★私がされたような、先輩からの侮辱

…本文の少し前で語られた筆者の経験のことを指す。筆者は先輩から「哲学の研究者になるのは無理だから諦めろ」と言われ、怒りがこみ上げ、絶対に見返してやると心に誓った。

問一

——(1)「ところが、同時に復讐には、どこか甘美な側面も含まれています。」とありますが、それはなぜですか。三行以内で説明しなさい。

問二

——(2)「もしかしたらアレクセイよりもはるかに傷ついているのかもしれませんが。」とありますが、本文の内容から判断した場合、そのように言えるのはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アレクセイに復讐心を認めさせるために、残酷な話を聞かせて彼を怒らせようとしたイワンは、苦痛と快楽という正反対の概念を同時に成り立たせなければならず、強い苦しみを抱え込むことになったから。

イ アレクセイの復讐心を駆り立てようとして、ありとあらゆる残酷な話を聞かせてアレクセイを怒らせようとしたイワンは、怒りの中で自分自身をすり減らし、さぞかし苦しんでいるだろうと考えられるから。

ウ アレクセイに自らの復讐心を認めさせようとしたイワンは、正当な理由がなく軽蔑されるときに人は怒りを感じるものだという人間の心理を説明することに成功したが、その過程でひどく苦しめられたから。

エ アレクセイの復讐心を駆り立てようとしたイワンは、復讐が実現した時の喜びを想像して快楽に浸っていたが、アレクセイの心の強さに苦悩し、アレクセイを怒らせることに終始していたと考えられるから。

問三

——(3)「しかし、アリストテレスは、この概念では復讐の限界を正しく示すことはできない、と考えました。」とありますが、アリストテレスは復讐についてどういうことを考えたのですか。三行以内で説明しなさい。

問四

——(4)「この問題を解決するものとしてアリストテレスによって挙げられるものが、貨幣です。」とありますが、これはどういうことですか。三行以内で説明しなさい。

問五

(5)

に入れる表現として、最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア かえって正義に反することになります。
- イ 比例関係による正義が必要になります。
- ウ むしろ復讐を果たしたことになります。
- エ 新しい価値を創造することになります。

問六

——(6)「ただし、このような考え方で、すべての復讐心に対して適正な限界を設けられるかどうかは、わかりません。」とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもに対する残酷な仕打ちへの損害賠償という、お金に換算して解決しようとする発想自体が、物事を共通の尺度によって評価するといった適正な限界を冒瀆してしまふものだから。
- イ 人命をめぐる復讐は、子どもに対する残酷な仕打ちに始まり、しばしば手のつけられない形でエスカレートしていくが、キリスト教がこの事態を回避することができたから。
- ウ 残酷な仕打ちを受けた子どもの傷や人の命といった、かけがえないものを別のものでも交換したり、お金に換算して解決したりすることなど、簡単にはできないものではないから。
- エ 人の命を物品の交換と同じように扱うことは、失われたもののかげがえのなさを否定する発想であり、人命をめぐる復讐を回避する道を私たちで見つけ出す必要があるから。

問七

A D の中に入れる語として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は二度以上使えません。)

- ア しかし
- イ たとえ
- ウ だから
- エ なぜなら

問八

——ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問九

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 復讐は、他者に軽蔑されて感じる激しい怒りと、その相手に復讐したいと欲求することから生まれる快樂との間で、せめぎ合っているが、その時、万人に共通の価値尺度である「貨幣」が力を発揮するのである。
- イ 復讐は、苦痛と快樂の両方が含まれているため、禁じられた心の持ち方だが、すべての復讐心に適正な限界を設けて社会を維持するため、「損害賠償」という概念を用いて金銭で解決することも一つの方法である。
- ウ 復讐は、「目には目を、歯には歯を」という同害報復の論理に基づいて設定されたものと言えるが、比例関係に基づく正義によって果たされなければならないという理由でキリスト教はそれを禁じたのである。
- エ 復讐は、必ずしも当事者が果たさなければならぬというわけではなく、復讐したいと願う相手が別の何かによって報いを受けたと思うことがあれば、自分の復讐は果たされたと感じ、怒りは鎮まるものである。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

これまでの主なあらすじ

高校二年生の佐藤ナオト（本文「ぼく」）は、マンガを描くことが得意で、漫画家志望である。同級生で映画部に所属する木崎ハル（本文「ハル」）は、既に自主映画祭で賞を取るほどの才能があり、映画を撮ることに高校生活のすべてを賭けていた。ある日の放課後、ハルは偶然にも机に置いてあったナオトのマンガを読んで気に入る。この話を映画にしたいと強く思うようになる。

「やっぱり断るんだ」

杏奈は残念そうだ。⁽¹⁾客観的に考えれば、受けない理由はない。校舎脇に細い川が流れていて、桜並木が続いていた。先月には花が咲き誇っていたが、今は葉が青々と茂っている。

ぼくはハルに対して、断りの理由として『自分の作品じゃないから』と答えた。とっさに出た言葉だったが、ぼくは半日かけてその意味を考え続けていた。

「映画化を頼まれたマンガは、ぼくが小学生のときに描いたんだ」

この話は杏奈を含め、誰にも打ち明けたことがなかった。校舎から少し離れただけで、一面の田んぼが広がった。雲の形が徐々に夏に近づいている。関東北部にあるぼくたちの街は、空を遮る高い建物がほとんどない。

「そんなのがあったんだ」

「父さんが出て行く直前に描いた作品なんだ」

「……そうなんだ」

杏奈が黙り込む。父さんが家を出た当時、杏奈はふさぎこむぼくを氣遣ってくれた。男女の派閥のせいで疎遠になっていたが、その頃を境に再び親しくなった。父さんのことを持ち出したことで杏奈はそれ以上触れずにくれた。Y字路に差しかかり、ぼくは杏奈と別れる。

昔のぼくは父さんのためにマンガを描いていた。だから『春に君を想う』の存在は必然的に父さんを思い出させることになる。そのためあの作品を面白いと感じつつも、忌避する気持ちも根強く抱いている。

ただ、それ以外にも映画化を断った理由はあるように思われた。ぼくは

20

15

10

5

今でも『春に君を想う』を超えられていない。だからこそ過去の自分に嫉妬している。ぼくは昔のぼくのことを羨ましかったせいで、あのマンガが誰かに選ばれることが許せなかったのだ。

翌日、登校するとハルがぼくの席の横で仁王立ちしていた。これまで以上の本気の眼差しに、逃げるべきではないと悟った。

「今日の昼休み、映画部の部室まで一緒に来て」

「わかった」

ぼくがうなずくと、ハルは無言で自分の席についた。昼休みはすぐにやってきた。ハルについていき廊下を早足で進む。背中から見ると、どこにもいる普通の女子だった。上履きのかかどが踏み潰されている。歩きながらハルが訊ねてきた。

「わたしの映画、観たことないよね」

「そうだけど」

なぜ断言できるのだろうか。そう考えているうちに映画部の部室に到着する。文化部の部室は校舎の北側に集中していて、日陰なので空気が湿っぽかった。ハルが映画部と書かれたドアに鍵を差し込み、ひねると鈍い音が鳴った。ドアが開くと、かび臭さが漂ってきた。スイッチが入り、部室を灯りが照らした。

ハルに続いてぼくも足を踏み入れる。壁の金属ラックに数台のカメラやレンズ、たくさんの本やディスクがあった。銀紙を貼ったパネルや大量の毛布、三脚などが並べられ、木箱には見たことのない機材が置かれている。学ランやブレザー、スーツや清掃員らしい作業服、ナース服など様々な衣装も吊るされてあった。

「今からわたしの映画を観てもらおうね。その上で断るならあきらめろ」

「わかった」

ぼくがうなずくと、ハルはノートパソコンを操作した。壁に額縁があり、乱雑な文字で「ルビッチならどうする？」と書かれてあった。意味は全くわからない。ハルが部屋の中央に椅子を置き、その正面にある白色の巨大なスクリーンに光が投影される。

ハルが分厚いカーテンを閉めると、外からの光が完全に遮られた。蛍光灯を消すと、スクリーンにパソコンのデスクトップ画面が映し出されているのがわかった。

55

50

45

40

35

30

25

「はじめね」

ハルがファイイルにカーソルを合わせる。スクリーンが暗転して、部室が一瞬だけ暗闇になる。その直後に画面に数字が表示され、無音のままカウントダウンが進んでいく。

5、4、3、2、1。

映画が、はじまる。

それは一人の女子高生の物語だった。制服も校舎もうちのもので、校外の景色も近所だ。主役の女子高生はクラスメイトに恋をしていたが、相手の男子生徒は転校が決まる。女子生徒は男子が家を発つ間際に告白を決心し、授業中の教室を飛び出す。女子生徒は必死に走るが、様々な困難に襲われる。

あらずじにすると、それだけだ。恋のライバルによる妨害や急病のおぼあさんなど障害も典型的だが、一つ一つの困難がわかりやすい。必死に走り続ける主役の姿は胸を打ち、小気味よいシヨットの切り替えが気持ちを高揚させる。

狭い路地を走り抜ける場面には今にもカメラに衝突しそうな迫力があり、俯瞰の映像は普段見慣れない分、物語の世界を広げてくれる。

前半で葛藤の末に救った人たちが、後半で主人公の助けになるのも心地良い展開だった。そして最後、主役は想い人と対峙する。告白しようと息を吸い込む瞬間、ぼくは女子生徒に感情移入していることに気づかされた。

どんな結末を迎えるのだろうか。期待に胸が膨らむ。女子高生が口を開いた瞬間、画面が暗転する。スタツフロールが流れ、ぼくは深く息を吐いた。告白の行方はわからないままだが、満足感に包まれていた。余韻に浸っているとスタツフロールは終わり、ハルが部屋の電気を点けた。

室内の時計を見ると、上映時間は十五分くらいだった。もっと長い気もしたし、短いようにも感じた。ぼくは映画を観ながら時間を忘れていた。

「わたしに映画を撮ってもらいたくなかったでしょう？」
得意げに聞いてくる。してやったりという表情にも納得してしまいうら

いの、最高のエンターテインメントだった。ハルはぼくが自分の映画を観たことがないと断言した。それは一度でも観たことがあれば、断られない自信があったからなのだろう。ぼくは深く、息を吐く。

「実はあのマンガは、小学生のときに描いた作品なんだ」

85

80

75

70

65

60

あの映画を突きつけられた以上、逆らうことなんて無理だ。それでもあと少しだけ抵抗したかった。

「あれを小学生が？」

ハルが困惑している。信じられない気持ちは、ぼくだって理解できる。

「ぼくはずっとマンガを描き続けている。今のぼくの作品を読んでくれな

いか。気に入ったら、最新作のほうを映画化してほしい」

「新作があるならぜひ読みたい！」

ハルが目を見開かせ、吐息がかかりそうなくらい顔を寄せてくる。

「家にあるから今度持つてくるよ」

「そんなの待てない。今日の放課後、家に行くね」
母がきれいな好きなので、いつでも人を呼べる程度には片付けてある。(3)

くの部屋にも見られてまじいものはないけれど、問題は他にあった。

「家に誰もいないんだけど」

「だから何？ ああ、楽しみだなあ」

ハルは全く気にしていない様子だ。気を遣うほうが馬鹿らしい。昼休みの終了を予告するチャイムが鳴った。あと五分で午後の授業がはじまる。ハルは手早く片付けを済ませ、ぼくたちは部室を出た。廊下を駆け足で急ぐ。

ハルの映画を観たせいでまだ、心臓の鼓動が速かった。あの作品を生み出した監督がそばにいる。(4) その事実は憧れの漫画家が近くにいるみたい

に、一人のファンとして胸が震えた。

ハルはバス通学らしく、歩いてぼくの家に向かうことになった。ハルの足取りは妙に軽い。杏奈に付き添いを頼もうかと思つたが、入院中の母親に渡す物があるらしく、放課後すぐに学校から姿を消してしまった。

高校から自宅まで徒歩で十五分もかからない。あつという間に到着し、マンシヨンのドアの鍵を開ける。玄関で靴を脱ぎ、ハルを連れ立って部屋に入る。女子を部屋に招くのは杏奈にマンガを貸す時くらいなので、さすがに緊張してしまふ。

「わっ、すごい」

ハルは壁一面のマンガ本に感嘆の声を上げ、珍しそうに顔を近づけた。新旧ジャンル問わず集められた大量のコレクションに部屋を訪れた人は必ず目を奪われる。しかしハルはすぐに数々の名作から顔を逸らした。

120

115

110

105

100

95

90

「さあ、早く読ませて」

「ああ」

勉強机の引き出しを開けると、茶封筒がたくさん入っていた。タイトルが書かれていて、ぼくは最新作と自信作を選ぶ。茶封筒を差し出すと、ハルは大事そうに受け取った。

「ありがとう」

ハルはベッドに勝手に座り、茶封筒から原稿を取り出し出した。期待が表情から見て取れる。目の前で作品を読まれるのは気恥ずかしく、ぼくはたまらず部屋を出た。

ハルに渡したマンガはどちらも三十ページ強だ。ぼくが投稿している少年漫画誌の応募要項に合わせたのだ。最新作は不思議な力が使えるスマホアプリで起こる。ドタバタを描いたラブコメディで、自信作は高校で起きた自殺未遂事件を解決するミステリーだ。

冷蔵庫を開けるとオレンジジュースがあったので、二つのコップに注ぐ。部屋に戻るとハルは早くも二作目を読みはじめている。ハルの座るそばのフロリングにジュースの入ったコップを置くけれど反応はなかった。

ぼくは勉強机の椅子に座り、オレンジジュースを飲んだ。爽やかな甘酸っぱさが口に広がる。(5) 原稿に向かうハルは真剣で、眼球が小刻みに動いている。

数分後、ハルが顔を上げた。原稿を封筒に戻し、ぼくに返してきた。

「絵柄や作風から判断して、『春に君を想う』と作者は同じみたいだね」

「そう言っているだろう。それで、どうだった？」

「はつきり言っておくけど、どちらも映画にする気はないよ」

ぼくはつばを呑みこみ、声が震えそうになるのを必死に抑えこんだ。

「どうしてだ」

「自分でもわかるでしょう。面白くないからだよ」

断言するハルに、ぼくは反論できなかった。

「新しい作品は正直平凡だった。あえて映画化する意欲なんて湧いてこない。でも『春に君を想う』は違う。技術的な拙さは否めないけど、ページをめくる手が止まらなかった。あれは本当に傑作だよ。小学生が描いたなんて未だに信じられない」

そんなこと言われなくても、ぼくが一番わかっている。

「わたしは『春に君を想う』を映画化したい。あのマンガには、わたしに

150

145

140

135

130

125

足りないものがある。だからあれじゃなくちゃいけないんだ」

「やっぱり駄目だ」

指摘が凶星だったからこそ腹が立った。手にした封筒を叩きつけたい衝動に駆られる。情けないと思うけれど、自覚している欠点だからこそ人は反発を覚えるらしい。

「どうしてあのマンガに固執するんだ。あんたは天才なんだろう？ 自分で好きに脚本を書いて、思うように映画を撮ればいいじゃないか！」

ぼくが怒鳴るとハルは顔を強張らせ、それから怒りの表情になる。

「……天才なんかじゃない」

絞り出すような声に、ぼくは何も言えなくなる。(6) ハルが力いっぱい拳を握りしめた。立ち上がったハルが背中を向け、ドアに手をかけたところで立ち止まる。

「お邪魔しました」

部屋を出て行き、ドアが閉まる音がした。追いかけてしようとしたぼくは、床に置いたコップを蹴飛ばしてしまう。オレンジジュースがこぼれる。拭くべきか迷ったが、放置して玄関に急ぐ。だけど靴はもうなくて、外に出てもハルの姿はどこにも見えなかった。部屋に戻ると、広がったジュースがクッションに染みこんでいた。

(友井羊『映画化決定』)

170

165

160

155

問一

——(1)「客観的に考えれば、受けない理由はない。」とありますが、「ぼく」は「ハル」から映画化を頼まれたのに、なぜそれを断ったのですか。三行以内で説明しなさい。

問二

——(2)「わたしの映画、観たことないよね」とありますが、「ハル」がこのように言ったのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の映画の上映時間は十五分くらいであるものの、映画はマンガ以上の最高のエンターテインメントであり、人々を魅了し続けると信じていたから。

イ 映画部には映画化に十分な機材がないと「ぼく」が思っているとわかり、改めて断られるのを覚悟した上で、それでも一度映画を観てもらおうと思ったから。

ウ 自分の映画の魅力を知ってもらうことで、「ハル」の映画と『春に君を想う』の作品とは内容的に相性がよいことを「ぼく」に確かめてほしかったから。

エ 一度でも自分の映画を観たことがあるならば、その作品の素晴らしさに魅了されているはずで、映画化の依頼はまず断られないだろうという自信があったから。

問三

——(3)「ぼくの部屋にも見られてまずいものはないけれど、問題は他にあった。」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女子を部屋に招くのは「杏奈」にマンガを貸す時くらいなので、誰もいない自宅にいきなり女子の「ハル」を入れるというのは、どうしても気を遣うことになるから。

イ 誰もいない自宅に女子の「ハル」を呼ぶということに以前から抵抗を感じていたため、いつでも人を呼べるように部屋を片付けてあるとはいっても、やはり緊張するから。

ウ 『春に君を想う』を読みたいという女子の「ハル」の熱意は、「今日の放課後、家に行くね」という発言から伝わってきたが、実際にはまだ部屋の準備ができていなかったから。

エ いつでも人を呼べる程度には片付けてある部屋にしていたとしても、女子の「ハル」に気を遣わなくてはならないとは思えず、そのことをずっと悩んでいるから。

問四

——(4)「その事実は憧れの漫画家が近くにいるみたいに、一人のファンとして胸が震えた。」とありますが、このときの「ぼく」の心情はどのようなものですか。三行以内で説明しなさい。文末は「…心情。」としなくてよい。

問五

——(5)「原稿に向かうハルは真剣で、眼球が小刻みに動いている。」とありますが、「ハル」は「ぼく」の新作マンガの原稿を読んだ後、どのような感想を持ちましたか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 内容が平凡で面白くないため映画化する気には全くならず、絵柄や作風から判断しても以前読んだ『春に君を想う』と同一の作者だとはどうしても信じられなかった。

イ 平凡な作品で面白くない、あえて映画化する意欲など湧いてこない一方で、『春に君を想う』には自分に足りない部分があり、とにかくこの作品を映画化したいと思った。

ウ 読む者は誰もがページをめくる手が止まらなくなるほどの本当の傑作である『春に君を想う』と比較すると、技術的な拙さは否めないと映画化を断らざるをえなかった。

エ 小学生が描いたなんて未だに信じられない『春に君を想う』は、たしかに本当の傑作なのだが、平凡で面白くない新作マンガには「ハル」の足りないところがあるとも思った。

問六

——(6)「ハルが力いっぱい拳を握りしめた。」とありますが、このときの「ハル」の心情を三行以内で説明しなさい。文末は「…心情。」としなくてよい。

問七

——A「息」とありますが、次のⅠ～Ⅴの「息」を使った慣用句のⅠ～Ⅴに入る最もふさわしい言葉をひらがなで答えなさい。()内はそれぞれの意味を表します。

- Ⅰ 息が

Ⅰ

 (ひどく緊張する)
- Ⅱ 息が

Ⅱ

 (一つのことをずっと続ける様子)
- Ⅲ 息が

Ⅲ

 (それ以上続けられなくなる)
- Ⅳ 息を

Ⅳ

 (生き返る)
- Ⅴ 息を

Ⅴ

 (ほっとする、一休みする)

問八

(一)

——B「ドタバタ」とありますが、本文におけるこの語の表す状態や様子として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 荒々しく躍動する様子
- イ 冷静さを失っている様子
- ウ 慌てふためいた滑稽な様子
- エ 騒がしい音に悩まされる様子

(二)

次のⅠ～Ⅲの表現の、Ⅰ Ⅲ に入る最もふさわしい言葉を、《語群》の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は二度以上使えません。)

- Ⅰ 試合前の会見では両選手がⅠ 睨み合っていた。
- Ⅱ 大学を卒業しても、就職もせずⅡ している。
- Ⅲ 甘えん坊の妹は、一日中私にⅢ している。

《語群》

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | ばらばら | イ | バキバキ | ウ | ブクブク | エ | バタバタ |
| オ | バチバチ | カ | ぼさぼさ | キ | ドロドロ | ク | グラグラ |
| ケ | ボコボコ | コ | ブカブカ | サ | べたべた | シ | ぶらぶら |

問九

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「ハル」はどうしても『春に君を想う』の映画化を実現させたいと思いい、「ぼく」に粘り強く依頼し続けていたが、これが小学生のときに描かれたという事実を信じてことができず、議論は平行線のままだった。

- イ 「ぼく」は未だに『春に君を想う』を小学生時代に描いたことに違和感をもっており、映画化に向けた「ハル」との話し合いの中で、それが父親の家出と深く関係していると気づき始めたため、やはり断った。

- ウ 「ハル」は『春に君を想う』を高く評価するとともに、「ぼく」の新作マンガに期待するあまり、部屋を訪れた人は必ず目を奪われるであろう「ぼく」の名作マンガのコレクションへの関心をすぐ失ってしまった。

- エ 「ぼく」は自分の新作マンガを平凡で面白くないと「ハル」に批判され、自分自身でも理解している作品の欠点を的確に指摘されたと感じたために、「ハル」の鋭い観察力に感心し、尊敬の念を抱くようになった。

